

筑紫（九州）の万葉集と風景画シリーズ（第65回）

さつ ま せ と
「薩摩の瀬戸」

くまた、長田 王が作る歌一首く

はやひと

隼人の 薩摩の瀬戸を 雲居なす 遠

くもい

とほ

われ けふみ

くも我は 今日見つるかも

卷三―248

作者・長田

王

ながたの おおきみ

（解説）遠く筑紫の涯^{はて}まで来て、あの隼人の住む薩摩の瀬戸を、空の

かなたの雲のように遠くはるかにであるが、今日初めてこの目で

見ることができた

・この歌の題詞「また、長田 王が作る歌」の「また」は「また、

同じ旅の折に」の意であり、本シリーズ第64回「水島と万葉集」

に記されている長田 王が「野坂の浦（熊本県葦北郡田浦あるい

は佐敷）」から北にある「水島」に渡る時と同じ旅の折の意であり、

この歌は「野坂の浦」から遠く南にある古来から潮の流れの速い

ことで広く知られていた「薩摩の瀬戸」を実際に、はるかかなた

に見ることができたことに対する深い感慨を述べた歌である。との説がある。

・この歌で詠まれている「薩摩の瀬戸」は万葉集の中で詠まれた土地を特定できる最南限の地である。といわれている。

・日本歴史地名大系によると、この歌に詠われている「隼人」は古代の南九州の地域とそこを本拠とした人々の総称とされ、また、

「薩摩の瀬戸」は、九州西部の熊本県と鹿児島県の一部にまたがる

天草諸島最南部に位置する長島あまぐさしよとう（鹿児島県出水郡いずみぐん）と九州本島の阿

久根市の北西部に位置する黒之浜との間の狭い海域をいい、今

くろのせと【黒之瀬戸】と呼ばれている。

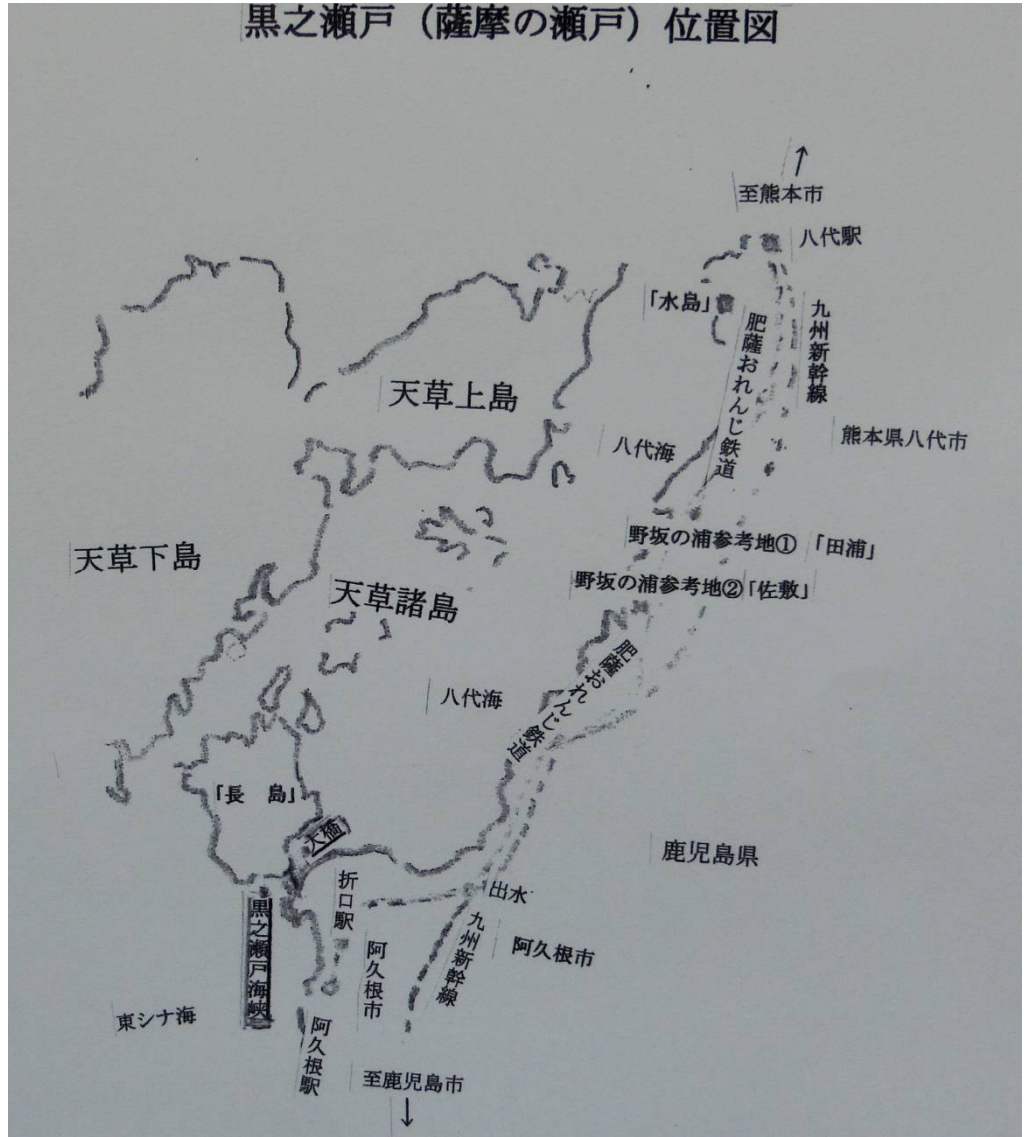
・黒之瀬戸は北の八代海と南の東シナ海を結ぶ長さ約3 km、最小幅330 mの狭い海峡であるため大変流れが速く特に大潮の時は最大8ノット（時速約14.4 km）の急潮となり大小の渦潮が発生し、川のようにごうごうと音をたてて、水が激しく岩にぶつかって白波をあげ、大渦をまいて流れるさまは一大景観である。

・黒之瀬戸は古くから潮流の速い航海の難所として知られ、九州地方の船乗りたちは「一じや玄海（玄界灘）、二じや千々石灘ちぢわなだ（現・長崎県の橘湾）、三じや薩摩の黒之瀬戸」といって恐れていたという。

(写生地) 昭和49(1974)年に黒之瀬戸に面する鹿児島県北西部に位置する「阿久根市」と対岸の「長島」に当瀬戸を横断する黒之瀬戸大橋(全長502m、幅7m)が架けられたことにより長島は本土と陸路で結ばれた。その後、この地は天草、長崎方面への交通の要所となった。

・「長島」にある黒之瀬戸自然公園「うずしおパーク」から黒之瀬戸海峡と大橋、対岸に阿久根市方面の風景を描く。(杏花)





(公共交通機関等)

・肥薩おれんじ鉄道折口駅下車、駅前から北西へバスで約4キロほどの漁師町の黒の浜で下車。

(参考文献)

・林田正男著「万葉の歌」伊藤博著「萬葉集釈注」・日本歴史大系「鹿児島県の地名」他